



⑬ 赤ちゃんのドレイ

大久保ヒロミさんの『あかちゃんのドレイ。』（講談社 ①～⑥ 2006-2010）を紹介します。衝撃的なタイトルは、作者ご自身の子育て体験をもとにつけられたようです。

「ドレイ兼漫画家」の母ピロミ、天然キャラで「戦力外」の父ピロキのもとに生まれた「2LDKの女王様」ヒヨ子。ピロミの語るセリフの「母」には、ときどき「ドレイ」とルビがついています。フィクションであることを忘れてしまうほどの説得力で、子育て家庭の楽しさと大変さを感じさせてくれる作品です。

24時間のたうちまわるほどの強烈なつわりに襲われていたピロミのもとに、予定日を超えて生誕した身長 50cm、体重 3700g の女王様、ヒヨ子。生後 1 か月が経過すると身長は 55cm、体重は 4500g になっています。母乳だけでは体重不足と医師に言われたピロミ。相談した先輩ママたちは母乳が出すぎて困ったタイプばかりで、粉ミルクを足すことに。ピロミは粉ミルクでご満悦なヒヨ子を見て、初めて経験する「ものすごく悲しい気持ち」になってしまいます。「母乳には甘いもの、パン、洋食がダメ…」というピロミに、夫ピロキは満面の笑顔で返します。「じゃあ、外国人はどうしてるんだろうねえ〜?」。被害妄想傾向で自分を追いつめてしまうピロミは、気の抜けた夫のひと言に救われたのです。

育児中の大人は「正解」を求めたくなります。育児に失敗したくない、もし我が子に取り返しが見つからないことが起こったらどうしよう…という気持ちです。周りの人の育児経験や育児書、ネットの情報などによって親たちは知らず知らず、追いつめられています。ピロミはつぶやきます。「ネットや本にどれだけ情報載っててもうちの子の情報なんてないんだもん…」。

生後7か月のヒヨ子は身長67cm、体重8000g。離乳食の初期から中期頃の様子が描かれています。初期、30分煮込んだおかゆでも口から出してしまうヒヨ子。「味をつければ」と出したちりめんじゃこと野菜のトロトロ煮。ヒヨ子はできたてなら食べるものの、冷凍して解凍すると食べてくれません。それなのにお湯は一気飲みします。

母の工夫は理不尽にも退けられます。まるで嫁の食事が気に入らないといびりたおす「鬼姑」かのように、ヒヨ子から振り回されていると捉えてしまうピロミ。しかしヒヨ子が、なにかの空き袋をさわっているときにスプーンを口元にもっていき、食べさせることに成功します。スプーンなどを持たせるとそちらに気を取られておもしろいほど食べるのが分かります。

喜んだのもつかの間、テーブルつき椅子に座るヒヨ子は、スプーンを落としては取ってほしいと手振りをするようになります。「手元がおぼつかないのか」と思っていたピロミは、ヒヨ子がわざと落とす場面を見てしまいます。それでも拾おうとするピロミの髪をヒヨ子が掴みます。ふたたび「鬼姑」が脳裏をよぎったピロミ。我慢の限界から、別のスイッチが入ったようにヒヨ子の前で自ら離乳食を食べ、ついでにカニ缶を食べ、チャーハンを食べます。「大人だけがこの素敵な食事でありつけるのよ！」

拾っても拾ってもスプーンを落とし続けるヒヨ子の行動は、一種の探索活動だと思われるます。外界のものごとに興味関心をもち、指さしたり確認したりして好奇心、探求心を育てていくものです。子どもにとっては大きな意味があるのですが、同じことの繰り返しを延々と求められたり、水やティッシュペーパーを出しっぱなしにされたりなど、大人が困る探索活動もたくさんあります。

大人は子どもの要求を否定せず、すべて受け入れなければならないのでしょうか。そんなことはありません。イギリスの精神分析家・小児科医のウィニコットによると、赤ちゃんの育ちにとっては「完璧な母親」より「ほどよい母親」である方が望ましいのです。赤ちゃんの要求に完全に答えられず、ときに間違い、すぐに対応できない生身の人間が行う育児によって、赤ちゃんは自分以外の人間がいる外の世界に気づいていくからです。

生後10か月のヒヨ子は身長72cm、体重8300g。つたい歩きを経てひとりで立つことができています。生後半年頃を境に母親から得た抗体が力を失っていくため、はじめての発熱が起こります。風邪と診断されたヒヨ子。数十分おきに水分を与えることになり、夜はうなされます。3日後には熱が下がっていますが、安心したピロミにヒヨ子は泣き叫んで抱っこを求めます。「ちょっとでも降ろそうとしようものなら、大絶叫し、病人じゃないだろ...と思う力でよじ登ってきます」とナレーションがついていますが、看病生活に味を占めた赤ちゃんは、少し回復しても甘やかされることを求め続けるため、風邪の看病でも1週間つきっきりになってしまうのです。

退屈したヒヨ子は自分がかくわえていたおしゃぶりをピロミの口に突っ込み、そこからピロミは風邪をうつされてしまいます。腹に据えかねて友人に愚痴の電話をかけるピロミ。すると「生まれてはじめての発熱だったわけでしょ？ しばらくは不安で甘えたくなるよー」「ピロミいちばん頼りにされてるんだねー」という返答が。我に返ったピロミはヒヨ子を抱きかかえます。「母（ドレイ）がそばにいただけでいいんだもんね しっかりいてあげなきゃ…」。

生後 11 か月のヒヨ子は身長 73cm、体重 8400g。女王として、ドレイの様子を語ります。「このドレイ、じえんじえんつかえなくてこまっているのでちゅ…」「女王のほちいものにきがついて“とってくれるのかちら”とおもっても わざわざ高いところにあげたりするんでちゅよ…なんの冗談かちら？」

「そのうえドレイはたいまんで 朝じえんじえんおきないのでちゅ！」（朝 4 時半にたたき起こされます）

「今じゃ女王が洗たくちて お料理もちて…」（洗濯物を散らかし、フライパンに手を伸ばします）

とりあえず整とんでも…と、ピロミのカバンの中にあつたネックレスを触るヒヨ子。「カラー 返しなさい」というピロミに不機嫌なヒヨ子は「ひとのモノほちがるなんて なんて強欲なドレイ！」 ピロキが他のおもちゃとの交換を求めたのに応じてネックレスを渡しますが、ヒヨ子は隙をついてガスレンジのグリルにネックレスを入れてしまいます。

ピロミがネックレスを見つけ、ピロキを責めます。「ちゃんと手の届かないとこ 置いてなかったんでしょ！」 ヒヨ子は悠然と「アラアラなに？ またケンカ？ まあ女王は広い心で見守ってあげるけど…」とすまし顔ですが、ピロミはヒヨ子にも怒ります。「ダメでしょ あんなどこにモノ入れちゃ！」 ヒヨ子は驚いて「八ツ当たり!? ケンカを許してやったというのに！」「もういいかげんにちなさい！ そんな態度ならばわたくちだってひとこと言わせてもらいまちゅよ！」 両親を前に、すわった眼でずんずんとやってくるヒヨ子。そのとき、こども番組の音楽が流れてきて、ヒヨ子はずられて踊り出してしまいます。その様子にこらえられず、ピロミとピロキは大笑い。ヒヨ子は「ほらやっぱりね…あたくちがいないとどうちようもないんだから… まあこれからも女王がかわいがってあげまちゅよ」（抱っこされています）

このエピソードは、作者がヒヨ子を女王に見立ててセリフをつけているのですが、これは言葉によるコミュニケーションがうまくできない育児のストレスを和らげる、とても上手なやり方だと思われまふ。0 歳児や 1 歳児が相手だと、子どもの欲求や思いを十分に把握することが難しいからです。

相手を女王様だと考えられたなら、わがままや無理難題を言われることも受け入れざる

を得ません。『あかちゃんのドレイ。』というタイトルは、母親として育児の大変さを受け入れざるを得ない状況に適応するために、ある意味では戦略的に選ばれた状況把握の枠組みを表していたのかもしれませんが。

保育者の職務の中には、保護者に対する子育て支援が含まれます。子育て経験がない保育者にも、育児や家庭生活の悩みについて、保護者からの相談が寄せられる場合があります。

本作品をはじめとした育児漫画をいくつか読んでおくと、子育ての楽しさと大変さが具体的に想像できるようになるだろうと考えます。



大久保ヒロミ（2006）『あかちゃんのドレイ。①』講談社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。